病院図書室　12(1・2):16-24,1991・1992

平成３年度　会員の学会発表抄録

第41回　日本病院学会（1991.6.名古屋）

（第41回日本病院学会講演集より転載）

医療従事者の生涯教育に対する図書室の役割

名古屋第一赤十字病院　○大平　美里
笠原　廣子

1.　はじめに

病院の情報管理上、運営を能率化するシステムが重視されているが、さらに医療情報の効率的管理が求められている。これは臨床・研究・教育研修に必要な新しい情報や過去の知識の管理である。

現在、医療の高度化、機能分担に伴い医療従事者全てに生涯教育の必要性が求められているが、その一端を担う図書室の存在価値の認識は必ずしも高いとは言えない。

2.　医療機関図書室ネットワークの動向

世界で発行されている医学雑誌は２万種類以上に及んでいる。その中で必要最小限なコア・ジャーナルだけとっても１つの病院図書室でFollowしていくことは量的な面で不可能である。従って医学情報を相互により広く、より円滑に入手できるように病院図書室の地域ネットワーク作りが各地で試みられ軌道に乗りつつある。又、日本医学図書館協会でも各地域ごとに病院図書室とのネットワーク形成への支援を始めている。

現在、構成単位を図書館員個人、あるいは病院とする医療機関ネットワークが全国で８機関活動している。各々が図書室担当者の資質向上を計ると共に、相互協力のもと情報の流通システムを形成し、必要とされる医学情報を迅速に医療従事者に提供し地域医療に貢献している。

≪愛知県病院図書室アンケート調査≫

調査対象：　198病院　（精神病院を含む100床以上の病院）
回　　答：　118病院
回答率：　59.6％

図書室の有無		有　：94（79.7％）			無　：24（20.3％）	
図書室の形態		独立：61（58.7％）			併設：43（41.3％）	
図書室の規模	面積	6㎡～　429.3㎡			平均：　68.48㎡	
	蔵書数	10冊～12,438冊			平均：　2,084冊	
	雑誌数	3種～　765種			平均：　66種	
担当者の職種		専任：7(6.1％)	兼任：50(43.9％)	医師：25(21.9％)	いない：34(29.8％)	その他：6(5.3％)
	兼任内容	事務：28	秘書：11	医局事務：6	病歴：5	回答無：2　その他：6

図書室を窓口として文献を入手するか	利用する：15（13.2％）	利用しない：99（86.8％）	
図書室を利用する場合の依頼先	大学図書館：11	病院図書室：3	その他：4
利用しない場合の入手方法	自分で大学図書館などへ行く：51	他に依頼する：55	

ネットワーク	A：病院図書室研究会　B：日本病院会図書室部会　C：近畿病院図書室協議会 D：東海地区医学図書館協議会　E：その他					
知っているか	A：10	B：14	C：12	D：14	知らない：86	
加盟しているか	A：2	B：2	C：4	D：4	E：1	加盟していない：109

3.　愛知県における病院図書室の現状

愛知県ではネットワーク形成に向けての動きは停滞しているのが現状である。その原因を県内病院図書室を対象に行ったアンケート結果より考察してみた。

表にもあるように118病院中94病院（79.7％）が図書室を設置している。しかし形態となると独立した図書室を持つ病院は61に過ぎず、全回答と対比すると約50％の病院にしか独立した図書室は設置されていない。併設では病歴を始めとし、講堂、会議室、中には図書室とは呼べないが医局の隅に書架が置いてあるとの回答があった。

図書室の規模の格差は大きいものとなっているが総合病院から個人病院を含む調査であるので当然とも言える。この量的な差を埋めるためにもネットワークは重要視されている。

専任の担当者を持つ図書室はわずかに7病院であり、兼任の担当者を持つ図書室は50病院である。しかし、兼務内容の重点は他の業務に置かれており図書室中心の兼任者は殆どいない。又、勤務年数も短く、これは病院における図書室の位置付けの不確定さと認識の低さを顕著に表すものである。

医学文献の入手方法について図書室を利用しない病院が90％を占めている。これは病院図書室に対するイメージを「書籍を保管する場」から「求める人に求める情報を提供する場」へと発展させていく必要がある事を意味している。

県内病院が入会可能なネットワークについても「知らない」「加盟していない」が回答の大部分を占めた。

4.　これからの図書室の役割

愛知県でのネットワークの歩みの遅れは、病院図書室の設置及び機能の基準が確立されていない事から生じる物的・人的不足に加え、医学情報を入手する際の図書室の存在意義の低さが原因と考えられた。このことは病院図書室の普遍的な問題である。

しかし、コンピューターシステムによる蔵書管理、オンライン検索・CD－ROMによる情報提供サービスを開始している図書室も少数であるが存在した。病院間の格差は大きいが各々の図書室の個性を生かし、点から線へと連携を高めることで、質のよいサービスを効率的に供給する医療従事者の実力養成に大きく貢献できるはずである。

今後、推進されるべき病診連携のためにも医学情報の交換が重視される。「蔵書保管」から「情報を提供することによる医療・研究・教育の支援」へと図書室の役割を再考する必要があろう。

病院図書室におけるCD－ROM文献検索

社会保険中京病院　　大橋真紀子

1.　はじめに

病院図書室の主な役割のひとつに「情報提供」がある。診療上必要とされる知識、情報を即座に図書室で手に入れることができれば理想的である。それには限られたスペース、限られた予算内で、本や雑誌を並べておくだけでは、充分といえないのではないだろうか。

当院では従来、医師は必要な文献情報を入手するのに、製薬会社のサービスに頼ることを通例としていた。図書室で、そのような文献情報の要求に応えるための手段としては、オンラインによる文献検索の導入も考えられるが、検討してみると経費や人などの面で負担が大きく、躊躇させられる。

近年、新しい文献検索手段としてCD－ROMが登場し普及しつつある。オンラインに比べ負担が軽く、簡便で、オンラインに近い機能を持つというが、実際に利用者を満足させることができるのか。病院にとって有用なものとなり得るのだろ

表1.　当院の概略

病床数：691床　　臨床研修指定病院		
全職員数（嘱託を含む）：923名		
（うち医師数：129名）		
図書室司書：1名（兼任）		
図書室面積（書庫を含む）：約		144㎡
蔵書数	単行書：約	5,000冊
	製本雑誌：約	9,000冊
受入雑誌数	国内雑誌：	107種
	外国雑誌：	110種

表2　システム構成

ハードウェア
本体（NEC　PC 9801-RA21）
ディスプレイ
プリンター
プリンターバッファ
3.5インチ外付ドライブ
CD－ROMチェンジャー
ハードディスク
MS-DOS
約100万円
ソフトウェア
Silver Platter社
（代理店：ユサコ）
MEDLINE　NEC版
1966～現在　25年間分
年間リース料　約40万円

表3 利用状況(導入後25日間)

延べ	68人
1日平均	2.7人
平均検索時間	25分
総利用者数	26人
1人平均利用回数	2.6回

表4　利用目的

- 臨床検討のため
- 学会発表のため
- 論文投稿のため
- 研究のテーマについて

表5

CD－ROM文献検索	プロパーに依頼した場合
・その場で検索結果が出る ・欲しい文献を納得いくまで検索 ・より的確なキーワードの選択による検索 ・プロパーに恩義を感じなくて済む ・自分のフロッピーにデータの保存ができる。	・1日～数日かかる ・人を介するので要求どおりの検索ができない事がある

うか。

今回、当院でもCD－ROMを導入したのでその経験から報告する。

2. 導入準備

当院の場合、それまで図書室にパーソナルコンピューターは無く、司書が文献検索についても、コンピューターについても素人に近い状態でのCD－ROM導入であった。まず、既に導入している大学図書館や病院図書室から情報を取り寄せ、図書委員会で検討を始めた。

医学関連データベースのCD－ROM版は数社から出ているが、遡及年数が充分で、価格的にもよしとされたSilver Platter社のものが選ばれた。機種は、互換性の面から付加価値があるだろうという理由で国内において最も一般的なNEC-9801を購入した。またその際、大学図書館のようにCD－ROM専用機にしなければならないほど頻繁な利用はないと予想し、パソコンを図書管理業務にも活用するという一石二鳥を狙って、ワープロソフトとカード型データベースソフトも同時に購入したが、CD－ROMは大量のメモリを必要とするため、セットアップする段階で苦労した。パソコンに関してかなり詳しい人の援助がなくては困難であった。

3. 文献検索の開始

Silver Platter社のMEDLINE　CD－ROMは、IBM版の実績はあったが、NEC版はリリースされた直後だったのでプログラム上のバグが多く、マニュアルもIBM版で分かり易いとは云えず、不便であった。

だが、検索方法は簡単で初めての者にでも馴染み易く、10分ほどで抄録付きの検索結果を手にすることも可能である。

実際には、より効率的に的確な検索をするためにはそれなりの機能を使うことが必要で、係も代行検索をしながらテクニックを覚えていくという状態が続いたが、とりあえずは思いつく単語（疾病名、薬剤名、術式など）をタイプするだけでも一応の検索はできる。

導入当初、係は、検索技術を覚えるのはもちろんのこと、利用者個々に検索方法を指導する必要もあり、また、同時にパソコンやプリンターなどの導入機器の扱い方にも不慣れなため、従来の業務に加えたこれらの作業は時間的にも負担が大きい。

しかし、CD－ROMの特長がエンドユーザーサーチといわれるように、パソコンに慣れている医師などはすぐに自分で直接キーボードをたたきながら、必要とする情報を検索するようになるので、徐々に余裕も出てくる。利用者にとって、知りたい時にすぐに答がでるというのが、一番魅力

的な面のようである。

ＣＤ－ＲＯＭの弱点として、オンラインよりも情報が遅れるということが心配されたが、実際にはオンライン検索による情報でないと駄目だという場合はごく稀なようである。少なくとも当院の医師達からそうした不満はあまり聞かれない。

問題点としては、ＣＤを読み込むのに時間がかかることも挙げられる。６枚のＣＤがセットできるようになってはいるが、実際に数年分の検索をする場合、器械の作業時間がかなり長く感じられるので、その点の改良が待たれる。

4.　おわりに

ＣＤ－ＲＯＭの利用者のほぼ全員から「便利だ。役立つ。ありがたい」などと予想以上の評価を得ることができた。

日々の診療に携わる医療従事者達は、より速い、より適切な情報を求めている。そのために図書室（病院）が、ＣＤ－ＲＯＭ文献検索サービスを提供することは、医療の質的向上への貢献にもつながり、大変価値あることではないかと考える。

病院図書室の情報提供サービス
── 期待される図書室へ ──

公立陶生病院　○青山真奈美，田中　法子
牛田　一也，矢野　雅
岩田　洋

1.　はじめに

当院は、２市１町を設置主体とする、病床数739床の総合病院であり、教育指定・臨床研修指定を受けている。

従来図書室は庶務課で管理をしていたが、1987年10月、医務局に医療情報部図書係が新設され、１名の係員が配された。以後、資料管理業務は、フルオーダーメイドの図書システムを構築してパソコン管理を行う一方、直接的な情報提供業務として、オンライン文献検索サービス・文献入手・事項調査などを徐々に導入してきた。母機関である病院に対して、図書室はどのような機能を持ち得るのか、限られた条件の下、利用者の情報要求に対応できる図書室となるためには何をなすべきなのか、を模索しつつ現在に至っている。

2.　図書室の概要

当図書室の概要は次の通りである。①所属：医務局医療情報部、②面積：196.2㎡、③図書予算：平成２年度800万円、④蔵書：単行書約4,000冊、製本雑誌約6,000冊、⑤雑誌：外国雑誌71種、和雑誌116種（うち18種は寄贈）⑥機器類：パソコン２台、コピー機・英文タイプライター各１台。

3.　レファレンス・サービス

病院図書室の基本的な機能や質的・量的な基準はまだ明確には示されていないため、各病院に於て、その規模や機能に大きな格差が存在しているが、礒野[1]は、「医師が患者を診察し治療するという図式」は、「どのような規模・形態の病院においても必ずみられる基本的な形」であり「どんな病院の医療従事者であっても文献をはじめとする医学情報が必要であるということには変わりがない」と述べている。医療従事者の日常の活動や生涯教育に於ての、文献・資料・情報の心要性は認められていながら、その提供こそ病院図書室の本来の機能であるとの認識は、未だ個々の病院で定着しているとは言い難い。予算・人員・スペース等に自ずと限界がある図書室では、個別的で多岐にわたる利用者の情報要求にはとても応じきれないのは確かである。ならば、個々の図書室の枠を越え、個々の図書室での所蔵の有無を問わず、利用者の希望する文献情報の提供・その所在の確認・入手、また様々な質問への回答などの「レファレンス・サービス」を、充実させていかねばならないのではないだろうかと考える。

当図書室では、次の２点を基本的な姿勢として業務を行っている。第１に、定型的な業務にはパソコンを徹底的に利用すること、第２に、利用者からの情報要求には、どんなものでも出来る限り応じていくことである。

4.　図書システム

当図書室の電算化は、業務の構築と同時進行の形で改良を重ね、昨年12月の「資料発注サブシス

テム」の追加で一応の完成をみた。

現システムでは、資料発注から受入、貸出管理、蔵書管理、雑誌管理、製本発注など、ほぼ全業務を網羅している。

資料の書誌的な事項は、資料発注時に入力しておき、受入時に若干の修正・追加を行うだけで登録が完了する。このデータは他の諸業務にも利用できるため、大変効率がよく1名でもかなりの業務量をこなすことが可能である。例えば貸出・返却管理もこのデータを利用し、未返却資料の催促状作成までほぼ自動的に行うことができる。

図書室における定型的な業務は、コンピューターを利用して、迅速・的確に処理し、情報サービスの提供を行う時間をつくるよう努めている。

5. ネットワークへの参加

前に述べたように、個別的で多岐にわたる利用者の情報要求に対応するには、院内資料の最大限の活用だけでなく、院外の情報をもいかに活用するかという点が重要である。当図書室は「近畿病院図書室協議会」[2]に加盟し、安定的な文献流通路の確保を図ると共に、様々な形でConsultationを受けている。更に、膨大な医学情報を抱える医学図書館の病院図書室への門戸解放の動きにも多いに期待をしている。

6. サービスの現状

① オンラインによる文献検索サービス

1989年6月にJOISを利用してサービスを開始したが、トラブルにより一時中断をした。しかし、1990年の7月から本格的に再開し、現在に至っている。1991年2月末日までの利用状況は次の通りである。

利用総件数は137件、月平均は17件である。利用者は、医師が122件で約90%を占めている。その他技師が約6%、看護婦は約5%で、事務員の利用は1件であった。

利用目的は、診療業務が70件と50%を越え、続いて研究が約20%、学会発表が約10%であった。その他は、投稿論文、勉強会等である。

費用総額は445,922円で、月平均55,740円、1人平均では3,255円であった。

ただし、場合によってはマニュアル検索も実施している。

② 文献入手サービス（相互貸借）

文献検索サービス開始に伴い、翌8月より試験的に開始した。

現在までの申込総件数は72件で、医師が23件で約30%、技師が約20%、看護婦と事務員がそれぞれ約15%であった。

依頼先は、病院図書室が49件で約70%を占め、医学図書館が19件で約26%、残りは学会、研究会などである。

③ 事項調査

特に制限は設けず、問い合わせがあったものについては、出来る限り調査している。

現在までの依頼総件数は8件で、医師、看護婦、事務員がほぼ同数であった。所蔵資料の調査のみで回答できたものは2件だけで、あとは外部機関への問い合わせ・資料の送付依頼などを併用し処理をした。

7. おわりに

上記サービスの現状の分析を行うにはまだ時期尚早であり、後の機会に譲りたいと思う。今は一件一件をていねいに処理することによって、利用者が図書室に対して、少しでも期待を持つようになっていただければと願っている。そして、情報提供サービスを医療従事者の日常活動に結び付けていくことにより、病院にとって真に必要とされ期待される図書室を目指して、日々努めていきたいと考えている。

≪文　献≫

1) 礒野龍一郎　病院図書室と医学図書館の使命．医学図書館　36(4)：215－224，1989；
2) 松本純子ほか　近畿病院図書室協議会．医学図書館　21(2)：84－91，1984；

第29回　日本社会保険医学会（1991.10. 千葉）
（第29回日本社会保険医学会演説集より転載）

Lートリプトファンの副作用情報の伝達メディアとタイムラグについて

星ケ丘厚生年金病院　図書室　○首藤　佳子
薬剤部　道下　佳子

1. はじめに

今回、当院においてLートリプトファンの副作用（ＥＭＳ）と考えられる症例があり、副作用情報の調査を行う機会があった。そこで、薬の副作用情報がどのようなメディアを通して、どのようなタイムラグで伝達されるのか、今回の経験をまとめたので報告する。新聞については全国紙、薬業界紙、医学関係業界紙各１紙を対象にした。

2. 日本における副作用情報の流れについて

トリプトファンの副作用（ＥＭＳ）については1989年10月米国で初めて報告されたが、日本ではこれに関する情報は表１のように流された。なお、当院に患者が入院したのは３月５日、４月はじめに担当医がNEJMの文献をみて副作用を疑い、４月13日に厚生省へ副作用モニター報告を出している。

これを詳細に見ると次のことがわかった。①情報量は厚生省発表や社会的なインパクトの量、大きさと比例する。また、メディアとしては新聞→医薬品関係雑誌→総合医学雑誌→学術誌の順に使われ、この順に記事が詳細になる傾向が見られた。②早い時期に新聞を通じて報道がなされ医薬品名が明らかになったが、詳細な臨床症状やデータ等の情報は乏しい。従って、ＤＩ室等での医薬品名からの検索は可能であろうが、臨床医の参考資料としては不十分である。③厚生省医薬品副作用情報は早い時期に出され、これらの中で臨床的に最も重要なものである。今回はモニター報告後 1.5カ月後に発行され、その後１～２カ月の間にこれを転載解説する雑誌記事が見られた。④専門学術雑誌に詳細な事例が報告されるのは約１年後であった。⑤記事の内容は米国での実状紹介→副作用の概要→Case Reportと変遷している。これと併せて情報量の多い米国内で1989年以降発表された文献82件の記事内容を調査してみた。それによると、サーベイランス報告→解説記事、Letter、Case Report（1990年前半）→病因、専門分野の知見、Clinicopathologicalな研究（1990年後半）→Literature Review（1991年）と内容が変化する傾向が見られた。

表1. 日本におけるLートリプトファン副作用情報の流れ
ーメディアとタイムラグー

	1989/11	1990/4-5	1990/6-7	1990/10-12	1991/1	1991/4
全国紙		4		2	1	
業界紙	1	5	2			
医薬品専門誌		1		1		
総合医学誌		1	3			1
専門学術誌		1				1
学会抄録集				1		1
その他		4*				1

＊4件のうち1件は厚生省医薬品副作用情報 No.102

3. 厚生省医薬品副作用情報について

このうち臨床的に有用な上記副作用情報は奇数月に発行されると直ちに厚生省薬務局より中央諸団体（日本医師会、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会等）、地方自治体薬務課、モニター病院（現在2,908病院）、報告医に配布され、さらに下部会員へと発行物等を通して伝達される。そのタイムラグは長いもので2.5カ月であった。また、雑誌「日本医事新報」はこの副作用情報を必ず掲載するが、今回は１週間後に掲載されている。このように厚生省医薬品副作用情報は早い時期に、広い範囲に亘って流される。これが十分活用されることが望まれる。

4. 副作用情報の検索について

当事例の検索は JOIS の Medline および J-Medicine ファイルを使って行った。データベースへの収録は原文献発行後約2.5カ月であった。1991年５月末現在、出力文献は邦文では３件のみで内容も不十分なものであった。また、原文掲載誌や

記事のタイプにより収録がなされないものが多いことがわかった。厚生省医薬品副作用情報は収録対象外となっている。欧文文献は122件。従って、今回は臨床的な情報のほとんどをこれら外国文献によって得た。

5. 結び

医薬品副作用情報は以上のようにさまざまなメディアを通して伝達されるが、その特性やタイムラグをよく知っておくことが重要である。また、Up-to-Dateな情報として医薬品関係のファクトデータベースの活用や厚生省の医薬品副作用情報の活用が十分なされることが望ましい。さらに、ＤＩ活動と図書室の活動の連携が図られるならば、より効果的な副作用情報の提供が可能になると思われる。

図書室へのＣＤ－ＲＯＭ文献検索導入の経験

社会保険中京病院　○大橋真紀子，松本　弘
資料管理課　若原　寛行，岡地　實

1. はじめに

当院では従来、医師が医学文献情報の検索をするには製薬会社のサービスに頼るのがほとんどであったが、今年２月図書室にCD-ROMを導入し、MEDLINE(NEC版)による文献検索を開始したのでその経験を報告する。

表１　システム構成

ハードウェア
パソコン　<NEC PC-9801 RA21>
カラーディスプレイ
プリンター　<エプソン HG-4000>
プリンター　バッファ
ハードディスク（内蔵）40 MB
CD-ROMドライブ<パイオニアＣＤ－ROMチェンジャー>
3.5インチ外付ドライブ
増設RAM　4MB
MS－DOS　Ver 3.3C
価格　約１００万円
ソフトウェア
Silver Platter社
MEDLINE　NEC版（1966年－）
年間リース料　約４０万円

2. ＣＤ－ＲＯＭ文献検索の開始

CD-ROM導入以前、図書室にパーソナルコンピューターは無く、図書室担当者にはコンピューターの知識もオンライン検索の経験も無かった。

導入システムは、図書委員会で遡及年数、価格、パソコン機種などを検討の上、決定した。

また、図書室業務用にワープロソフト（一太郎ver. 4.3）とカード型データベースソフト（The CARD３＋）も同時に購入したが、CD-ROM検索ソフトと同居させるにはメモリが足らず苦労した。パソコンに詳しい医師の協力を得て、立ち上げの時点で環境選択することにより動かすようにした。

検索は図書室サービスの一環として職員を対象とし、利用に際してお金はかからない。

導入後４カ月での１日平均利用者数は1.4人で、平均検索時間は29分。総利用者数は34人（うち医師33人、薬剤師１人）で、１人平均3.6回の利用があった。

3. 利用者の反応

利用者26人（全て医師）へのアンケート調査を行った。利用目的は、利用者の大半が臨床検討と学会発表の２つの理由を挙げている。

CD-ROM検索の利点、欠点は、プロパーに依頼してのオンライン検索との比較になってしまうが、その場で即座に結果が手に入ることと、人を介さず自分で検索するので欲しいものを納得いくまで探し出せるという２点に対して、皆が高く評価している。

オンライン検索と比べると情報の遅れ（タイムラグ）があることを、特に重要視する者はいなかった。

欠点として検索のためのキーワード（ＭｅＳＨ）の選択が難しいことが挙げられたが、係の勉強不足により適切なアドバイスができなかった事にも原因がある。

また、CD-ROMチェンジャーの機械的操作のための待ち時間が長く、何年分も遡って検索するとかなりの時間がかかることに対しては、ソフトの改良を期待したい。

表2　CD－ROMの利点

・その場で検索結果が手に入る
・欲しい内容を納得いくまで検索できる
・プロパーに恩義を感じなくて済み、気軽にできる
・自分のフロッピーディスクにデータ保存ができる

4.　担当者として

導入当初、係は自身が検索技術を習得しながら、利用者個々に検索方法を指導しなければならず、また同時にパソコンや周辺機器の扱いに慣れることも必要で、従来の業務に加えて時間的にもかなり負担が大きかった。

しかし検索の基本操作は簡単で、とりあえずは病名など思いつく単語をタイプするだけ（フリーターム検索）でも求める何かは出てくるため、利用者の一応の満足は得られたこと、また、オンライン検索と違いコストが固定価格なので、気軽に検索しながら覚えていくことができた点などに救われ、意外に早く「文献検索サービス」を軌道に乗せることができた。

今後の担当者としての課題は、前述のような安易なフリーターム検索だけで終わってしまいがちな利用者に対して、より効率的で網羅的な検索が可能であるキーワード検索のための、適切なアドバイスができるようになることだと考える。そのためＭｅＳＨの構造をよく理解し、医学用語に馴染むことにも努めたい。

5.　おわりに

現在CD－ROMは、"速い"文献情報入手手段として利用者に喜ばれ、図書室サービスの大きな一部となっている。また、来年早々でる医学中央雑誌のCD－ROM版によって国内文献の検索ができるようになれば、医師だけでなく看護婦やパラメディカルらの利用も予想され、ますます院内での需要が増すものと思われる。

病院図書室と生涯教育
── 社会保険広島市民病院図書室サービス──

社会保険広島市民病院　図書室　○岡橋　郁子　岡本美保子　赤木　笑人

1.　はじめに

今日、社会保険広島市民病院（診療科23科、病床数774床、研修指定病院）図書室（司書２名；医局秘書兼務、年間図書購入予算1,360万円、蔵書数14,468冊、購読雑誌数318誌、図書室面積 330㎡）は図書委員会が中心となって、医師をはじめとする医療従事者の生涯教育をバックアップする施設として、医学・医療情報の提供のみならず拡大された図書室サービスを行う情報センターへの展開している。当図書室におけるサービスの現況、及びこれらのサービス実施におけるマネージメントのポイントを報告する。

2.　広島市民病院図書室サービス

(1)　情報サービス

1)　図書、雑誌、ビデオテープの収集、整理、貸出：収集は全科全部門よりアンケートを募り全部門で構成された図書委員会で検討後購入する。

2)　オンライン情報検索：依頼者立ち合いのもとに司書（サーチャー）による検索を行う。

3)　相互貸借：院内に所蔵しない情報については国内医学図書館・病院図書室との相互貸借を行う。迅速な入手にFaxを利用する。

4)　病棟・外来常備図書配布：「今日の治療指針」「医療薬医薬品集」等の図書を１年１種類アンケート調査により配布する。

(2)　サポートサービス

1)　複写：図書室内に複写機を設置し、セルフサービスで複写を行う。院内では唯一私用利用が許可されており、院外利用者・看護学生も利用できる。

2)　視聴覚機器貸出：講堂・図書室の視聴覚機器の管理に併せてプロジェクター・ビデオデッキ・ＯＨＰ等の貸出しを行っている。

3)　Faxサービス：病院の代表Faxとして明示

し、受信の連絡、送信の指導を行う。

4) ワークステーション利用指導：初心者を対象にワープロ操作の指導を行う。

(3) 研究支援サービス

1) 学会発表・論文投稿用資料作成：学会発表のスライド原稿・ポスターセッションのパネル等の作成を地方会以上の範囲で作成する。

2) 取次ぎサービス：翻訳、研究用写真・スライド作成、私物図書購入等の取次ぎサービスを行う。

(4) 図書出版

1) 社会保険広島市民病院医誌の編集：図書室が編集事務局として原稿収集、整理、編集委員・印刷所との連絡、校正、発送を行う。

2) 医局会報（院内報）作成：院内の情報誌を図書室の機器およびネットワークを利用して作成する。

3) 図書室資料：オリエンテーション時の配布資料「図書室利用のしおり」「雑誌所蔵目録」及び、図書室見学者用「図書室概況」を作成する。

3. 図書室サービス実施のマネージメント

図書室サービスは生涯教育を目標として、利用者の要望に応えて次第に拡大されてきた。これらのサービスを司書2名で、全ての利用者へ同様にそして円滑に行うよう努めている。そのポイントは次のとおりである。

(1) セルフサービスの徹底

1) 施設の整備：情報種別にコーナーを設け、明確なレイアウトとし、さらにサインの明示をした。

2) オリエンテーション：新規採用時に医師はサービスの説明に加えて図書室内のツアーを、他の医療従事者は新人オリエンテーションに組み入れている。

(2) 業務の合理化

1) マニュアル作成：図書室業務の範囲および流れを明確にした。さらに、業務が広範囲であるため、それぞれに簡単なマニュアル、例えば、オンライン検索や医学雑誌編集の方法を作成した。

2) サービス利用の規格化：申込みはそれぞれ所定の用紙を作成し必要事項の漏れを防いだ。料金支払は医局員は給料引き去りとし、その他は即納とした。

3) 機器の導入：ワークステーション、オンライン検索、Fax、複写機、スライド作成機等機器の導入により業務の合理化を行った。

4. おわりに

時代の進歩・利用者の要望に応えた図書室作りを開始して22年を経た。今日、これらのサービスにより図書室は活況を呈し、大いに喜ばれている。これも管理者の理解、図書委員会の指導、利用者の協力、司書の努力の相乗効果によるものと思われる。